

尾州産地物語

—親が子に語り継ぐ—

麻沙絵枯

子 戦後も国内だけでなく外国にも輸出したの。

父 昭和30年代から尾州は海外にも販路を求めたよ。太平洋戦争前にも中国に進出した企業は多かったが、終戦で工場や事務所は放棄せざるを得なかった。新しい輸出販路はアメリカに向けられたのだよ。

13、ニューヨークへ

昭和30年代、日本の経済は高度成長に入った。政府の経済白書は31年(1956年)「もはや戦後ではない」と新しい時代の到来を宣言した。戦後の食料不足や衣料不足が解消され、消費が活発になった。

こうした時代、需要を拡大する最大の方法は宣伝活動である。尾州の毛織物がいくら良くても消費者やユーザーであるアパレルやテーラーが知らなくては需要の拡大は望めない。

30年前後、さまざまな宣伝・販促大会が各地で開かれ、尾州は進んで参加した。地元一宮での全国織物競技大会、京都での尾西毛織物展示会、名古屋での愛知県毛織物振興展、東京での毛織物ファッションショーと新製品展示会、大阪での全日本紳士服技術コンクールなどへ積極的に参加した。このうち26年(1951年)、一宮で開かれた全国織物競技大会(その後輸出振興全国織物競技大会に改称)は、現在もジャパン・テキスタイル・コンテスト(JTC)として、継続されている。尾州産地で50年以上も継続している催事はこの展示会だけである。

海外にも目は向けられた。30年1月、愛知県毛織物特別展示会がアメリカのニューヨークとサンフランシスコで開かれた。羊毛輸入の自由化にともない、輸出にも振り向け

られる余地が生まれたわけだが、「アメリカにおける日本の毛織物の市場性がまったくわからない」(『毛織のメッカ尾州』)中での手探りだった。

尾西毛工は北米毛織物市場調査団を組織してアメリカに乗り込んだが、情勢は厳しかった。この頃、日本のアパレルが、綿素材の“ワンダラー・ブラウス”という1着1ドルの安値のブラウスをアメリカに輸出しており、アメリカは日本の安値攻勢に神経を尖らせていた。それに当時、アメリカでは毛織物といえばメード・イン・イングランドが有名で、尾州の毛織物の知名度はまったくなかった。それを売り込むのだから、大変な苦労を伴った。

結果は「製品に対する評価はまずまず」(同)で、「半分は成功」(同)だったが、これが、日本製毛織物をアメリカに直接紹介した初めての機会であり、その意義は大きい。

調査団は団長の渡邊治彦(渡玉毛織)、今井貞一(第一毛織)、渡邊龍男(日興毛織)、市橋正三郎(市橋毛織)、山内清一(丸山毛織)だった。輸出のパイオニアとして記録しておく。その後、尾州毛織物の輸出は、産地の努力もあって飛躍的に拡大していった。この意味で調査団の功績は大きい。

実は、誰もが心配していた構造問題が表面

化したのもこの時期だった。景気は神武景気、ナベ底不況、岩戸景気と好況、不況が循環したが、ナベ底不況に入った32年末、終戦から朝鮮戦争の特需で増えつづけた生産設備は、32年に戦後最高の毛織物生産高を記録した。

不況下の大增産に、尾州は真っ青になった。設備問題はその後、過剰設備の買い上げ、廃棄という事態を招くことになる。政府は繊維産業に操短を指導し、毛紡績などは25%から30%の操短を行い、従業員の一時帰休、臨時休業、賃下げなどが併せて行われた。

この頃から「繊維は斜陽産業」といわれるようになった。正式に言うと自動車など他産業と比較して成長率が鈍化しただけであるが、構造上、過剰設備をかかえて、景気の後退期の度に操短を繰り返してきた。「繊維産業は操業短縮の歴史であった」と言われるゆえんである。

34年(1959年)、ナベ底景気が収束し、岩戸景気が始まり景気は回復した。この年の国民総生産伸び率は17.3%にもなり、海外諸国は「日本の奇跡」と注目した。

4月に皇太子殿下のご成婚があり、日本は祝賀ムードにつつまれ、毛織物の需要も回復した。史上最高の豊作も見込まれ、神武景気を上回る戦後最高の好景気、とマスコミは報じた。「消費者は王様」という言葉が宣伝文句になったのもこの頃で、白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機は三種の神器として消費を牽引した。

岩戸景気は全国津々浦々に及んでいた。「好事魔多し」というが、9月26日、この地方を猛烈な台風が襲った。最大瞬間風速48.5メートル、上陸時の中心気圧919.7ミリの伊勢湾台風である。名古屋南部は高潮に襲われて、浸水した。死者・不明者5,098人、負傷者3万8,921人、家屋全半壊83万3,965戸、浸水36万3,611戸(『朝日新聞』)という大きな被害を出した。尾西毛工では60余の工場が倒壊した

が、津島地区の毛織物業界の被害はさらに多く、生産活動は一時停滞を余儀なくされた。

『片岡毛織90周年史』は津島の被害を生々しく記述している。

「台風が到着したとき、伊勢湾は運悪く満潮時、暴風と高潮が重なりあって潮の山は7メートルを超え、海岸と河口付近の堤防はズタズタに破壊された。(中略)名古屋市南部と伊勢湾北部は長い間、水に浸かったままという惨状であった」

羽島の被害について全壊65戸、半壊118戸と『ウールに賭ける』が証言している。産地の組合は災害復興資金の長期貸し付けを実施して、罹災者を救済した。

しかし、打撃からの回復は早かった。名古屋通商産業局管内の鉋工業生産指数は11月には「早くも被災前を上回り、12月には空前の高水準を示した」(『豊島その歩み』)という回復ぶりを見せた。

この頃、産地を悩ませたのは進学率向上にともなう求人難と賃金の高騰であった。各企業は全国各地に足を伸ばして、求人活動を行った。『毛織のメッカ尾州』は「新規学卒者の確保は年々むずかしくなっていた」とし、37年の求人希望155社、1,873名に対して、確保は111工場、670名だった、と記録している。希望の約36%しか満たされなかったわけだ。大手企業が16ミリフィルムで企業PRを作成したのも、この頃である。

尾西毛工は従業員定着のため、あの手、この手の施策を行ったが、共同給食もその1手法であった。

<昭和30年初頭の毛織物輸出>

33年	309万円
34年	534万円
35年	745万円

<求人難の状況> 37年の場合

求人希望	155工場	1,873名
実現	111工場	670名

いずれも尾西毛工